

「たといそうでなくても」 あんいすく 安利淑物語——殉教を覚悟して



「たといそうでなくても」というのは、旧約聖書のダニエル書で、異教の王から偶像礼拝を強要されたヘブル人青年たちが、死を覚悟して信仰を貫いた出来事をもとに、安利淑女史が自伝につけたタイトルである。日本では発売直後からすぐに売り切れとなるほどの衝撃を与える本となった。

1930年代、すでに日本に併合されていた朝鮮半島では、朝鮮神宮を初めとする神社が次々と建てられ、人々は神社参拝を強要された。しかしこれを拒否したキリスト教会への迫害は苛烈を極め、宣教師たちは国外退去、多くの牧師や信徒は大勢逮捕されることになった。そればかりか会堂もろとも信徒が焼き殺される、という事件まで発生したが、日本の教会の指導者たちは「国民儀礼」として拝礼をするよう説得するありさまであった。

1939（昭和14）年、安利淑、朴寛俊長老二人は帝国議会の傍聴席から「日本政府は悔改めて暴政を朝鮮から徹廃せよ」と大書した警告文を議場に投げおろして、直ちに逮捕、投獄された。その後、安女史は日本の刑務所から平壤の刑務所に送られ、六年間の苦しみを経験したものの、多くの受刑者が彼女を通してキリストを信じ、希望と喜びの生涯へと導かれた。そして、死刑執行の直前に日本に原爆が投下され、終戦を迎えたのである。

今回は、1970年代、多くの人に感動と衝撃を与えた『たといそうでなくても』を知る人が大変少なくなったことをふまえて、忘れてはならない日本の戦前、戦中の知られざる朝鮮統治と、それを生き抜いたクリスチャン女性、安利淑女史の奮闘をご紹介します。

記

1. 日時:2016年6月10日(金) 10:30 AMより
2. 場所:ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師:尾崎富雄(ゴスペルホール代表)

入場無料。どなたでも参加できます。